一・はじめに

「何故、西南学院の戦争責任・戦後責任を考え、その告白に至ったか」

西南学院名誉顧問　寺園喜基

西南学院は、創立百年を記念するに際して自らの戦争責任・戦後責任を公表することになりました。どうしてこのようなことを考え、実行するに至ったかについて手短に記したいと思います。

私は二〇〇四年に院長に就任しましたが、これをきっかけに学院史を読むことが多くなりました。二〇〇六年の学院月報四月号巻頭言に「感謝・悔い改め・前進…学院創立九十周年を覚えて」という題で次のように書きました。「戦時下での学院の苦難が語られます。宣教師の送還、キリスト教撲滅運動、軍部の干渉等、社会の逆風の中で、学院が苦難を強いられたのは確かです。しかし被害者としての苦難のみを語ることは許されません。戦時下におけるキリスト教の責任についても検討しなくてはならないと思います」（『西南の風』に収録、六三頁）。

さらに、この思いをストレートな形で、翌二〇〇七年二月発行の神学部学生会『道』第三一号に、「罪責と歴史…学院創立九十周年に想う」という文章を書きました（『西南の風』一六九～一七一頁）。そこには戦時中、西南学院が「学兵は往く！只黙々として口に大言壮語することなく、心中深く天皇陛下万歳を唱えて、雄雄しく出陣するのだ」、「すめらぎの、みいつ深く御代、皇風四海にあまねく時代の創造のために勇戦奮闘される様に願います」（『西南学院新聞』第六二号、一九四三年二月二五日発行）と言って学生を戦争に送ったことを書きました。たしかに、西南学院とその指導者たちは決して戦争遂行者でも積極的な戦争協力者でもありませんでした。時の政府と時代の精神に逆らっては、学院の存立は危うかったでしょう。しかし戦後、歴史を振り返って、「あの時は間違っていた」と告白する文章は『西南学院新聞』の何処にも見当たらないのです。だからこの文章の最後に私はこう書きました。すなわち「あの時は消極的にでも従わねばならなかったでしょう。それは仕方のないことだ、というのがあの時の姿勢です。しかし、戦後、あれは間違っていたと表明しなかったなら、あの時の姿勢は今でも変わっていないことになります。前進のためには罪責の告白がなくてはならないと思います」と。

このような考えを持っている時に、本学OBの坂本譲氏との出会いは具体的な一歩を歩み出させました。坂本氏は大学ラグビー部の八十年史を編纂する過程で、本学関係者が学徒出陣で多数戦死したことを知ったのです。そして、二〇一〇年五月に学院に対して、戦死者のための追悼式をして欲しい旨を申し出られたのです。

これを受けて、百年史編纂委員会関係者と学院宗教局とが、学外メンバーとして奥田知志氏（日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師）も交えて、追悼式を巡って三回の話し合いを開きました。そこにおいては、追悼式を行おうという意見、これは神道的な慰霊祭と混合されるので行うべきでないという意見、また、もっと大きな見地から西南学院が戦争とどう向き合ったのか、また今日どのように考えているのかということを総合的に検証すべきだという意見などが出されました。そして最後の意見を受けて、常任理事会は同年十月「西南学院と戦争」検討委員会（＊）を設置することとなりました。この委員会に付託された検討題目は、（一）「西南学院と戦争」を西南学院としてどのように考えるか、（二）西南学院の戦争責任告白についてどのような形で行うか、（三）追悼式を巡る坂本氏への対応、というものです。（伊原幹治「『西南学院と戦争』の検証」、『西南学院史紀要』Vol.8, 二〇一三年を参照）

この検討委員会の答申を受けて、先ず上記の（三）に当たる「西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式」が二〇一三年六月に開催されました（『西南学院史紀要』Vol.9, 二〇一四年を参照）。そして次に、この検討委員会を母体として上記の（一）、（二）に相当する課題を取り上げるため、常任理事会のもとに二〇一五年八月にさらに戦争責任告白文（案）作業部会（＊＊）が設けられました。そして、学内で様々な討議を経て、「西南学院創立百周年に当たっての平和宣言」が出来上がりました。